

ユニット4: マハーバーラタの概要: パーンダヴァ誕生以前と死去以後の物語 (updated 2010-12-09)

ここではパーンダヴァの誕生以前と死去以後の主な出来事を示す。いずれも主として第1編「初編」で語られている。

1. パーンダヴァ誕生以前の主な出来事

ヴィヤーサ マハーバーラタの創唱者。パンドウとドリタラーシュトラの生物学的父親。

サティヤヴァティーの母親アドリカーはアプサラス(天女)であったが、呪いによって魚に転生していた。あるときウバリチャラヴァス王の精液を飲み込んで身ごもった。魚を捕まえた漁師が腹を裂くと、中から男女の赤ん坊が出てきた。男の子はのちにマツヤ国の王となった。女の子は魚の臭いがしたのでマツヤガンディー(魚の臭いのする女)と名付けられ、川岸の漁師の娘として育てられた。

パラージャラ仙が川を渡るとき彼女を見染めた。彼女は、処女性を失わないこと、臭いを消すことを条件に彼と交わり、妊娠して男の子を産んだ。マツヤガンディー(サティヤヴァティー)は処女性を回復し、麝香の香りを発するようになった。男の子は成長してヴィヤーサと呼ばれようになった。母と呼ばれたときには母の前に現れるという条件で母親のもとを去って、森の中で修行にはげみ大聖者となったが、醜悪な容姿であった。

ビーシュマ 幼名はデーヴァヴラタ。パンドウとカウラヴァの大伯父。

ビーシュマの父はクル族の王シャーンタヌ、母はガンジス河の女神ガンガーである。女神ガンガーが呪いで人間の女に転生していたときに生まれた。シャーンタヌは森の中でガンガーと出会い、ガンガーが子どもに何をしても口を出さないという約束をして結婚する。ガンガーは生まれてくる子どもを次々にガンガー河に投げ込むが、ついに8番目の子どもデーヴァヴラタだけは川に投げ込むことをシャーンタヌは認めなかった。怒ったガンガーは子どもを連れてシャーンタヌのもとを去り、森の中で息子を育てる。のちにシャーンタヌは立派に成長したデーヴァヴラタを見つけ、連れ帰って皇太子にする。

シャーンタヌは森の中で狩りをしているとき、麝香の香りに惹かれてサティヤヴァティーに出会い、結婚を申し込む。父親の漁師は娘の子が王位につくことを条件に結婚を認める。父の悩みを知ったデーヴァヴラタが王位を辞退し、さらに生涯の独身を誓ったので、シャーンタヌはサティヤヴァティーと結婚することができた。この出来事からデーヴァヴラタはビーシュマ(恐るべき人)と呼ばれるようになった。シャーンタヌは、息子への感謝から、恩恵として自分が望む時に死ぬ力をビーシュマに与えた。

シャーンタヌとサティヤヴァティーの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤの二子が生まれるとすぐにシャーンタヌは亡くなった。遺児の後見人となったビーシュマはチトラーンガダを王位につけたが、彼はやがて戦死したので、ビーシュマはヴィチトラヴィーリヤを王位につけた。

ビーシュマは、ヴィチトラヴィーリヤの結婚相手を求めて、カーシー国の王の三人娘アムバー、アムビカー、アムバーリカーの婿選びの儀式に参加した。ビーシュマは競争に勝って、三人娘を連れてハスティナーブラに戻った。アムバーはすでにシャルヴァ王に愛を誓っていたため、シャルヴァ王のもとに送られ、ヴィチトラヴィーリヤはあとの二人と結婚した。しかし、彼は子どもを残さないまま逝去した。

王家の断絶を恐れたサティヤヴァティーは、ビーシュマに二人の寡婦と交わって世継ぎをもうけるよう頼んだが(ニヨーガと呼ばれる慣習)、生涯独身の誓いを守るビーシュマは断った。そこでサティヤヴァティーは息子ヴィヤーサを呼び出し二人の寡婦と交わせ、アムビカーからドリタラーシュトラ、アムバーリカーからパンドウが生まれた。交わる時、ヴィヤーサの容姿に恐れをなしたアムビカーは目を閉じたためにドリタラーシュトラは生まれながらにして盲目であり、アムバーリカーは蒼白になったのでパンドウは青白い容姿となった。

パーンダヴァとカウラヴァにとってヴィヤーサは祖父、ビーシュマは大伯父にあたる。

シカンディン ドラウパディーの兄。アムバーの生まれ変わり。

アムバーはシャルヴァ王のもとに行ったが、彼は、アムバーはすでにビーシュマによって獲得された女であるとしてその求愛を拒絶した。行き場のなくなったアムバーはビーシュマのもとに戻って結婚を迫るが、ビーシュマは拒絶した。ビーシュマへの怨念を抱いて死んだアムバーは、パンチャーラ国の王ドルパダの息子シカンディンとして生まれる。一説によると、シカンディニーという女性として生まれたが、ヤクシャと性を交換して男性になったとされる。バーラタ族の大戦争では、ビーシュマが「女性」であるシカンディンと戦う意志をもたないことを利用して、アルジュナがビーシュマに致命的な矢を放つ。

パーンダヴァにとってシカンディンは妻ドラウパディーの兄にあたる。

ジャワ(インドネシア)では、スリカンディ(Srikandi)と呼ばれ、常に女性である。アルジュナに恋をし、彼か

ら弓術の手ほどきをうけて、ついには妻の一人となる。武芸に秀でた女性として描かれる。

カルナ 太陽神スールヤとクンティーの子。

カルナの母クンティーは、まだ結婚する前の若いころ、聖者ドゥルヴァーサスによく仕えたため、子どもを授かりたいときに唱えれば五回まで願いがかなうマントラ(呪文)を授かった。好奇心から太陽神スールヤを呼び出し、未婚のまま妊娠してしまう。箱に入れて川に流された子どもは、子どものいない御者の夫婦に拾われ、息子として育てられた。この子がカルナである。

パーンダヴァにとってカルナは父親違いの兄であったが、カルナが死ぬまでそのことは彼らに知らされていなかった。

ドローナ パーンダヴァとカウラヴァの武芸の師匠

彼の父バラドヴァージャはガンジス河で水浴する天女の裸身を見て欲情し、もらした精液を枀の中に入れておくと、その中から男の子が生まれたので、ドローナ(枀)と名付けられた。

子どもの頃、ドローナはパンチャーラ国の王子ドルパダとともに勉強し、二人は無二の親友となった。やがてドルパダはパンチャーラ国の王となり、ドローナも結婚して息子アシュヴァッターマンを得た。しかし貧しかったのでドルパダに援助を求めたが、ドルパダは、王は王のみを友とすると断って、貧しいドローナを侮辱した。復讐を誓ったドローナは、ハスティナープララに行き、ビーシュマに認められてパーンダヴァとカウラヴァの武芸の師匠となった。

ドローナは、指導の条件として、弟子たちにドルパダを捕えるよう求めた。ハスティナープララの王子たちはパンチャーラ国を攻め、武芸に秀でたアルジュナがドルパダを捕獲してドローナの前に引き出した。ドルパダが謝罪したので、ドローナは彼を許し、パンチャーラ国を二分して和解した。

2. パーンダヴァ死去以後の主な出来事

パリークシット アルジュナの孫。ナーガ犠牲祭の祭主。

パリークシットの父はアルジュナの息子アビマニュ、母はマツヤ国の王ヴィラータの娘ウッターラである。パーンダヴァとカウラヴァの戦が始まった日にウッターラはパリークシットを身ごもった。アシュヴァッターマンの夜襲のときウッターラは腹部に打撃をうけたため、死産をした。クリシュナの力で死児は生き返り、パリークシットと名付けられた。

パリークシットはマードラヴァティーと結婚し、ジャナメージャヤなどの息子たちをもうけた。ユディシュティラの後を継いで王位につき、60年間善政をしいた。

パリークシットはあるバラモンを侮辱したことから、ナーガ(コブラ)のタクシャカによって噛まれて死ぬ呪いをかけられ、防備の甲斐なく死んでしまった。

ジャナメージャヤは父パリークシットがナーガに噛まれて死んだので、ナーガの犠牲祭をおこなった。この犠牲祭のときに、ヴィヤーサの弟子ヴァイシャマパーヤナによって叙事詩『マハーバーラタ』がジャナメージャヤに対して語られたとされる。

参考文献(追加)

沖田瑞穂 2008 『マハーバーラタの神話学』 弘文堂。

ドゥ・ヨング 1986 『インド文化研究史論集 欧米のマハーバーラタと仏教の研究』、塚本啓祥訳、平楽寺書店。

中村了昭 1998 『マハーバーラタの哲学 - 解脱法原典解明』(上・下)、平楽寺書店。

前川輝光 2006 『マハーバーラタの世界』 めこん。